

[ドラゴンと大学]

2024年の干支は辰である。辰は龍である。

話は40年ほど前（1982年～86年）、私のH大学時代に遡る。K駅とH大学を結ぶ大学通りの西側、K市中1丁目に雀荘ドラゴンがあった。フレンチ・レストランのLe Vent de Vertの北西隣である。麻雀では三元牌を龍に喩えることがある。三元牌を「ドラゴン」と呼ぶので、それが雀荘名の由来であろう。

大学通りの東側には雀荘みどりがあり、こちらは学生が集まるやや大きな雀荘であった。ドラゴンとは小規模の雀荘で、H大学教授御用達の趣があった。雀荘ドラゴンの主人はママと呼ばれ、誰彼構わず“べらんめえ口調”で喋る豪快な方であった。どこが良かったのか腑に落ちぬが、私はママに気に入られた。昼食や夕食をその雀荘で食べるが多くなった。1985年のつくば科学万博の際には、ママの孫娘の女子高生をエスコートするように言われ、案内したことがある。この孫娘はなかなかの美形で、ママも昔はきれいであったのではなかろうかと推察する。一介の学生に一日プライベート・ツアーを頼むのは、当該ご時世ではほとんどあり得ないことであろう。

よく大学教授3名とママで打っている場に私は呼ばれ、ママが食事や買い物に出ているときの交代要員となった。徹夜麻雀の開催がある際は、よく夜10時くらいに呼び出された。教授たちはまあまあの年齢であったが、徹夜にも強かった。雀風、スタイルは教授によって様々で、数学的に美しい理想を常に求めている教授もいれば、戦略・戦術を実験する場と考えている教授もいれば、心理面の分析中心に考える教授など多士済々で、話も出来て非常に面白かった。

雀荘ドラゴンには、べらんめえ口調のママ、麻雀に好き勝手な理想を追い求める教授たち、私を含めた学生と、多様性の重要さが詰まった空間が現出していた。

H大学は主ゼミと副ゼミ（トンネル・ゼミ）を取れる制度があった。私は社会学部生であったので、主ゼミは社会学部の米国社会・文学としたが、副ゼミは商学部の管理数学であった。副ゼミの教授は東京大学理学部、大学院数物系研究科数学専攻博士課程を修了したO教授であった。その雀荘ドラゴンでよく打たせていただいた。管理数学ゼミは、私のほかには学生2名、院生1名の4名所帯であった。院生以外は麻雀が好きであった。1985年には、私を含めて2名だけのゼミとなった。

○ 教授には、ノーベル経済学賞受賞の米国経済学者 Kenneth J. Arrow が創始した社会選択理論の数学的な構造やアローの一般（不）可能性定理の数学的な証明を学んだ。

社会選択理論（social choice theory）または集合的選択理論（collective choice theory）は、個人の多様な選好（preference）をベースに、個人の集合体としての社会選好の集計方法、社会による選択ルール決定方法、そして社会が望ましい決定を行うソーシャル・メカニズム・デザインを解明していくものである。

「投票者に 3 つ以上の独立した選択肢が存在する場合、どのような選好投票制度（社会的厚生関数）であっても、個々人の選好順位を社会全体の完備かつ推移的な順序に変換する際に、絶対必要な評価基準（定義域の非限定性、非独裁性、パレート効率性、無関係な選択肢からの独立性）を全て同時に満たすことは出来ない」というのが、アローの定理である。

したがって、アローの定理は多数決制が非自明なゲームということで、分析するにはゲーム理論を援用して考えたほうが良いということになる。あるゲームには効率的な均衡が存在するとは限らないので、本来社会の誰 1 人も望んでいなかったような結果（例えば独裁制）がその社会で出現してしまうこともあるということを指し示している。

ノイマン型コンピューターでも知られる数学者フォン・ノイマンと経済学者オスカー・モルゲンシュテルンが創始したゲーム理論も ○ 教授に学んだ。現在は完備情報か不完備情報の非協力ゲームのほうが世間的なスポットライトが当たっている感じがするが、あの頃の私は協力ゲームのほうが面白く思えた。協力ゲーム（cooperative game）とは、ゲーム理論において、複数のプレイヤーによる提携（coalition）行動が可能であるとされた場合のゲームである。協力ゲームにおける提携行動は、提携をする各プレイヤーの利得を増加される場合に行われる。提携行動を行うためには、事前の交渉と互いに拘束力のある合意が必要であると考えられている。この考え方にしたい、協力ゲームについては交渉を行う非協力ゲームから説明することがある。

○ 教授から教わった理論は、現在も色褪せることなく、考え方はそのまま使えると思う。社会人となってからは目の前で色褪せていくものが非常に多かった。流行り物のビジネス書の類がそうであった。一過性で売れた芸人や歌手のように長く続かず、本物の芸のような長く続くものの素晴らしさには、なかなか出会えなかった。薄ぺらな流行り物は時間をおかずして廃れた。会社の方針や導入されるツールは時を置かずして変容し消えた。

大学で学ぶことの意義の一つは、「出来るだけ長く続く本物の理論に、触れられ経験出来ることにある」と思っている。天職に出会うのも難しい。長く友人であるのも同じで、なかなか難しい。

40歳を過ぎてから、大学院で Master や Doctor の仲間とディスカッションし、また研究会や学会に参加する中で、「出来るだけ長く続く本物に出会いたい」という気持ちを新たにしました。

龍は 2024 年の干支。また長く続くような本物に会うために、新たな地平を眺めに出掛けよう。 境界のニューフロンティア探検にも積極的に出掛けたい。

2023 年 12 月 30 日

M.Fujii



四神相応図

北方



白虎

秋



夏

南方

朱雀



東方 春

青龍

